コールリッジのワーズワス批評

黒　岩　忠　義

An Essay on Coleridge's Criticism of Wordsworth

Tadayoshi KUROIWA

Charles Lamb (1775–1834) が *Lyrical Ballads* 出版当時の批評界における Wordsworth の不人気と十分な理解を得ていなかった原因を彼の独創性と大胆な発想とに帰し，また余りにも深い思考性と感受性との故に，当時の読者たちには容易に受け入れ難いものであったと語るとき，一見 Lamb 程に彼にとって，心の暖い，かつ快活で眼識のある批評家はない。ところが彼よりも Wordsworth にとって偉大な批評家は S. T. Coleridge (1772–1832) であろう。Coleridge は当時の批評家達の中では学識に富みかつ分析的である。従って彼の Wordsworth 批評には心から傾聴すべきものがあるように思われる。まず彼による Wordsworth への多くの有益な言及は主として書簡集と *Table Talk* に見るが，彼に関する大部の批評は，何と云っても *Biographia Literaria*「文学評伝」である。殊にその中の Wordsworth にあてられた数章は，批評家達のもっとも多く論じてきた Wordsworth の詩の局面，つまり詩の言語と韻律の問題が Coleridge 自身の思想体系及び詩の短所，長所の問題をも含めて，集められ分析されている。そこでは Coleridge は詩の主題にも時折，言及するがそれは彼の主要な関心とはあまり関係はない。Coleridge は Wordsworth が当時の批評家達に悪評をかったのは，他ならぬその言語理論のためであったと信じていた。したがって彼はその理論の曖昧な陳述と做すところを修正しかつその誤謬を説明しようとつとめている。しかしそのような彼によるあらゆる論証にも拘らず，彼の言語理論は果して Wordsworth のそれとどれ程の違いがあるのであろうか。そこで Wordsworth が *The Preface*「序文」の中で展開した他のいくつかの基本的な点，つまり，詩人論，詩的創造の過程に関する陳述，また詩と科学との相違に関する哲学的論議等の問題を無視することによってすすめられた Wordsworth 批評のもつ意味を，三つにわけ，まず第一部においては，できる限り *BL* からの忠実な引用に謙虚に耳を傾け，第二部にては，それに対する批判的検討を，そして第三部は，それに基づいて得られる Coleridge の Wordsworth 批評に関する総括的結論としたい。

I

まず Coleridge は *Biographia Literaria** 「文学評伝」の中で二人の共同出版である *Lyrical*

* S. T. Coleridge, *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross, 2 Vols., Oxford, The Clarendon Press, 1969. 以下 *BL* と略す.

*Ballads*** 「抒情民謡集」出版のいきさつを19年まえまで逆り，その起源を説明する。それによれば *LB* 出版の本来の計画では Coleridge は少くとも一部において超自然的出来事を，ただしそれらの出来事が換起する感情の劇的真実の故に興味深い事件を書き，他方 Wordsworth は日常生活に手材し，そこに新奇の魅力を甦えらせ，しかも全く粉飾のない言語と日常の会話のことばで書くようにつとめることであった。この計画は Coleridge も了解した通り Wordsworth によるそれらの詩篇は実験的なものとなる筈であった。しかし Wordsworth はその主旨とは趣を異にした「Wordsworth 独自の詩風，つまり，彼の天性の特徴とも称すべき熱情的にして高雅な，終始一貫して調子を下さないことばづかいをもって書いた二三の詩をもつけ加えた」と云う。(*BL*. II, p. 6 参照)。そして，その後長い間論争が起ったそもそもの原因を Coleridge は *LB* 第 II 版に付した長い「序文」にその決定的な誤謬があるとする。曰く，

> 「彼は〔ワーズワス〕は，この序文の中で，実際はむしろ反対の意味に取れる節もあるように思われるにもかかわらず，このような文体，すなわち日常用語をもってする文体をあらゆる種類の詩にまで，おしひろげて用いることと，彼が（不幸にして曖昧な表現を用いたように思うが）日常生活と称したものには含まれないような語句と文体は，すべて誤った弁護の余地のないものとして排斥することを必死となって主張しているものと考えられた。そして長い間続けられた論争が起ったそもそもの原因は，たとえその方向が必死となっていたにもせよ，この序文，すなわちその中に独創的天才の存在を否定し得ないこの詩集につけられたこの序文のためであったのである。」[1]
>
> (in which, notwithstanding some passages of apparently a contrary import, he was understood to contend for the extension of this style to poetry of all kinds, and to reject as vicious and indefensible all phrases and forms of style that were not included in what he (unfortunately, I think, adopting an equivocal expression) called the language of *real* life. From this preface, prefixed to poems in which it was impossible to deny the presence of original genious, however mistaken its direction might be deemed, arose the whole long-continued controversy.)

そして Coleridge は当時の Wordsworth の不人気に対する責任は，彼の詩にあるのではなく *LB* 第二版への「序文」の中で表明されたその詩的信条にあると指摘している。

> それで Wordsworth 氏の作詩がそれ以来未曽有の反対攻撃に遭遇する運命に立ち至った真の原因は「抒情民謡集」の序文としてつけ加えられた論説に存するものと考えて差し仕えなかろうと思う。この排撃論の正当なゆえんを明らかにするために，詩そのものの中でも，比較的凡俗な詩句が多く問題にされ，かつ引証された。詩そのものだけであれば，そう云う点も壁の瑕疵として，あるいは少くともそれほどの失敗ではないものとして当然忘れられ，あるいは，大目に見られたことであろうが，それが意図的であり，深慮熟考の結

** W. Wordsworth & Coleridge, *Lyrical Ballads*, 1798. 以下 *LB* と略す.

果好んで書いたものとして，公言された時，直接反抗を激発するに至ったのであった。」(2)

(In the critical remarks, therefore, prefixed and annexed to the "Lyrical Ballads," I believe that we may safely rest, as the true origin of the unexampled opposition which Mr. Wordsworth's writings have been since doomed to encounter. The humbler passages in the poems themselves were dwelt on and cited to justify the rejection of the theory. What in and for themselves would have been either forgotten or forgiven as imperfections, or at least comparative failures, provoked direct hostility when announced as intentional, as the result of choice after full deliberation.)

しかしながら，Coleridge はかくの如く「序文」の多くの部分において Wordsworth と意見を異にするけれども，Wordsworth は彼の詩語改革が本来は「感情の真実性」と「劇的妥当性」とによって正当化されても，当時の詩人達によって虚飾と技巧とに専用された文飾と比喩とに向けられた限りにおいて，彼の任務は有益であった点を当然のこととして，評価しないわけでもない。すなわち，

「同時にまた最近10年ないし12年間に世に公にされた優れた詩とあの序文出版以前に作られた詩の大部分とを比較して見るとき Wordsworth 氏の努力は決して無益ではなかったと，彼自らが信じるのもまことに当然であることの印象を受けることを付言せざるを得ない。」(3)

(I cannot likewise but add, that the comparison of such poems of merit, as have been given to the public within the last ten or twelve years, with the majority of those produced previously to the appearance of that preface, leave no doubt on my mind, that Mr. Wordsworth is fully justified in believing his efforts to have been by no means ineffectual.)

しかし，会話の言語は一般的に詩にとって相応しい言語でないと Coleridge は考える。ましてや Wordsworth が主張するが如き「身分の低い，田舎の生活」("low and rustic life") の言語においてをやである。何故ならば，「そのような状態では，人はより強力に，より単純に，しかもより純粋で直接的な熱情をもって，美しい恒久的な自然の姿と，より接触して語る」(4) とする Wordsworth の見解は承服し難いからであろう。さらに続けて曰く，

「さて，"Brothers", "Michael", "Ruth", "The Mad Mother" 等々の如き，作者が多少劇的調子を添えている詩の中で最も興味あるものでは，そこに持ち出されている人物は，素朴と云う言葉そのものの普通の意味においては決して素朴な田園生活から取りあげられたものでないことは明瞭である。またこれらの詩に見られる情緒や言葉も，実際このような人物の心情や会話を如実に移しとったものと考えることはできるにしても，それは必ずしも『彼らの仕事や住居』と関連しているとは限らない他の原因や事情に帰することもできるのである。これらの詩に実際に取りあげられている程度のカンバーランドやウェストモーアランド地方の谷間に住む農牧を業とする人々の思想，感情，言葉あるいは風習は都

会と田園とを問わず，どんな生活環境においても同じような結果をもたらすような原因から説明することも可能である。」[5]からである。

(Now it is clear to me, writes Coleridge, that in the most interesting of the poems, in which the author is more or less dramatic, as "the Brothers," "Michael," "Ruth," "the Mad Mother," &c., the persons introduced are by no means taken *from low or rustic life* in the common acceptation of those words; and it is not less clear, that the sentiments and language, as far as they can be conceived to have been really transferred from the minds and conversation of such persons, are attributable to causes and circumstances not necessarily connected with "their occupations and abode." The thoughts, feelings, language, and manners of the shephed-farmers in the vales of Cumberland and Westmoreland, as far as they are actually adopted in those poems, may be accounted for from causes, which will and do produce the same results in *every* state of life, whether in town or country.)

かくの如く Coleridge は Wordsworth が主張するところの「身分の低い田舎の生活のもつ有効な感化力」は，それ自体極めて疑わしいものであることをつとめて示そうとしているように思われる。そして詩についてのColeridge の信条は Wordsworth が「序文」の中で公表せし見解とは全く相異るものであることを自ら確認し，十分，確信をもって Aristoteles の詩の原理を次のように援用してみせる。すなわち,「詩は本質的には理念的であって一切の偶然を避け，またそういうものを拒否する。詩において一見身分や性格や，また職業を具象化した個人と見えるものも，そのある階級を代表するものでなければならない。詩中の人物は種的属性，すなわちその種一般に共通する特性を帯びるものでなければならない。ある特殊な個人が恐らく所有しているだろうと思われる性質ではなくして，その立場から当然所有しているだろうと，前もって一般に予想できるようなそういう性質を帯びていなければならない (*BL*, pp. 33-34)。このように Aristoteles にその論拠をおく Coleridge にとっては，*LB* に収められた詩篇のうち，このような要件に適うものは，わずか *The Brothers* と *Michael* の二つの作品に過ぎない。即ち，Coleridge によればこの二つの作品中に描かれた人物は詩の目的が要求しうる特性である,あらゆる真らしさと代表的性質とを具備している。他方，*The Idiot Boy, Harry Gill, The Thorn* の如き作品の中で描かれた人物たちには特異性，すなわち偶然的特性しか認められず，殊に *The Thorn* においては詩人自身の想像力から自然に出て，詩人自身の言葉として語られた部分の方が一般に喜ばれ，また将来においても，そうであろうと云う理由から，Coleridge にとっては田舎の言葉は「いく分純化されたものであれば，詩にとって最良」とする Wordsworth の見解は妥当なものとしては認め難い。

「田舎の言葉は一切の野卑な田舎風が純化され，文法の法則に適合するように再構成されたものなら，田舎の人が伝える必要のある思想は比較的僅かで，また一層不明瞭であると云うこと以外には，どんなに学識があり，どんなに上品な，とにかく常識ある他の何人の言葉とも異るものではない。」[6]

(a rustic's language, purified from all provincialism and grossness, and so far reconstructed as to be made consistent with the rules of grammar... will not differ from the language of any other man of common-sense, however learned or refined he may be, except as far as the notions, which the rustic has to convey, are fewer and more indiscriminate.)

また言語の最良の部分は Wordsworth が語るように野人が親しむ事物に由来するものではなく，心そのものの活動についての深い反省に由来するものであり，内部的活動，すなわち，想像の過程や結果に対して，一定の記号を有意的に適用することによって作られるものであり，この大部分は教養のない人々の意識の中には全く存在していないと反対する。(*BL*, II, pp. 29-40)。ましてや彼の主張では，Wordsworth は「人間の真の言語の選択」("a selection of the *real* language of men") と云うことばを使うべきでなかった。そこで Coleridge は，まず第一に「真」のと云うことばの用法が曖昧である点に異議を唱える。

「各人のことばは第一に，それぞれの個性をもっている。第二に各人が属する階級に共通な性質をも持っている。第三に普遍的に使用される語句もある。... それで，『真』を『日常の』あるいは『共通の言葉』にかえなければならない。この『真』のと云う意味の言葉は，いかなる階級の言葉づかいにもあり得ないと同様に素朴な田園生活を営む人々の言葉づかいにも存在しないことはすでに述べたところである。それぞれの言葉に特有な部分をとり除けば，その結果はもちろん共通なものになるに違いないのである。... 問題は興奮状態にあると云うことばをつけ加えたところで，一向によくはならない。何故ならば，悦びや悲しみ，あるいは怒りなどによって非常に興奮した人の言葉の性質は，その人の心に前もって蓄えられていた一般的真理や観念や形象の，そしてそれを表現するための，言葉の数やその質の如何によらなければならないからである。何故なら情熱の特質は創造することではなくして，烈しい活動を引き起すことである。」(7)

(Every man's language has, first, its *individualities*; secondly, the common properties of the *class* to which he belongs; and thirdly, words and phrases of *universal* use.... For "real" therefore, we must substitute *ordinary*, or *lingua communis*. And this, we have proved, is not more to be found in the phraseology of low and rustic life than in that of any other class. Omit the peculiarities of each, and the result of course must be common to all. ...Neither is the case rendered at all more tenable by the addition of the words, *in a state of excitement*. For the nature of a man's words, where he is strongly affected by joy, grief, or anger, must necessarily depend on the number and quality of the general truths, conceptions and images, and of the words expressing them, with which his mind had been previously stored. For the property of passion is not to *create*; but to set in increased activity.)

次に Coleridge の Wordsworth 批評は韻文の言語と散文の言語の違いへと及ぶ。むしろ，この問題は彼にとって主要な関心事であるらしく多くのページが，この問題にさかれている。そこで彼は

「散文と韻文の言語との間には本質的違いはないとし，またありえない」とする Wordsworth の主張を検討する。Coleridge によれば，本質的と云う言葉はその第2義的用法では「同一の実体または主体の二つの変態の区別点，すなわち区別の根拠」を意味する。したがって，Wordsworth は詩を構成する語句の構成形式あるいは構造は本質的に散文のそれとは異ると云うことを否定したのであるとし，以下のような論評を試みている。

> 「真の問題は真面目な散文には相応しく自然でありながら，韻文の詩には不釣合で異様な感じがすると云ったような表現の様式や構文，またそう云う文の配列がないかどうかと云うことである。またこれを反対にして用いる言葉の種類や回数や，場合等の点で同じように重要な主題を取り扱いながら，立派な散文としては欠点と見られ、似つかわしくない感じのすると云ったような言葉と文章の配列法や云いまわし（と呼ばれるもの）の用い方とか選び方が真面目な詩の言葉の中にはないかどうかと云うことである。私はそのいずれかの場合にも，互いに一方が他方に代る時，たがいに不適当になることがしばしばあるのであろうし，またなければならないことを主張するのである。」(8) と。
>
> (The true question must be, whether there are not modes of expression, a *construction*, and an *order* of sentences, which are in their fit and natural place in a serious prose composition, but would be disproportionate and heterogeneous in metrical poetry; and, vice versa, whether in the language of a serious poem there may not be an arrangement both of words and sentences, and a use and selection of (what are called) *figures of speech*, . . . which on a subject of equal weight would be vicious and alien in correct and manly prose. I contend that in both cases this unfitness of each for the place of the other frequently will and ought to exist.)

そこで，このような彼の主張の根拠は一体どこからくるのであるか。それはまぎれもなくその根拠を彼は韻律の起源においている。彼の主張によると，高揚かつ興奮の状態では「熱情の働きを抑止するために」韻律を手段として均衡が求められる。そこで韻律は二つの条件を必要とする。まず第一は韻律の要素はその存在を高められた興奮からくる自然の言語を伴っている筈である。次に人為的，有意的な経画の努力もまた韻律語の中に認められねばならない。このように熱情と意志，「自発的衝動」と「自意識的目的」とは互いに浸透し合う統合関係がなければならない。またこの融合調和は「意志によって和げられ，支配された熱情が人に伝えることができるある快感をうるために，自然の熱情を誘発し，しかもそれを維持して行けない場合には，必要以上の，とても堪えられないような種々の語形や言いまわし（発生的には情熱の所産であるが，今日，意志力の養子となったもの）の乱発となって顕れる，と。(*BL*, II, p. 50 参照)

次は Coleridge は韻律へ効果の点から論をすすめる。それによると，韻律は，それ自身として本来的に作用する時には「一般の感情及び注意の活発さと感受性とを増大する傾向がある。. . . したがって，このようにして高められた注意と感情とに対し，それ相応の糧と，それに適切なものとが与えられない場合は，必ず一種の失望を感じるに相違ない。」(*BL*. II, 51)。更に彼は云う。韻律は

酵母に似ている。酵母はそれ自体において，無価値であるが，「適度に混入すれば，酒に活気と威勢をつける。」(II, 51)。そこで Coleridge は何故韻律で書くかと云う問に対しては，

"Because I am about to use a language different from that of prose." (*BL*, II, 53.)

と答えるのみである。(*BL*. ff 50-53)。

第3の批判は，韻律は「詩の固有の形式であり，韻律がなければ，詩は不完全にして，どこか欠けていることになる』」と云う演繹論に基づく。したがって，韻律と結合せるものは，本質的に詩的であるべきであり，また詩は普通ならざる興奮の状態を生みだすのであるから，それに応しい言語の違いを必要だと云う。

第4の批判は，第3の批判と密接につながりがある。つまり詩のすべての部分は統一され，調和ある全体を形成しなければならず，そこでは、副次的な部分と一体となったものと云う要求（必然性）からくる。

最後に Coleridge は，散文の言語と詩の言語との間には本質的違いがあり，また存在するべきであるとする完璧な証拠を歴史上最もすぐれたと，彼が評価する詩人達の範にみようとする。(*BL*. Ch. XVIII, 参照)。

II

このように見るとき Coleridge の Wordsworth 批評はその大部分が *BL* の中では韻文と散文との「本質的相違」に向けられていることがわかる。しかし Coleridge の解釈は Wordsworth がそのことばによって意図したそのものを真に示すには余りにも思弁的にしてかつ衒学的と云うべきだろう．何故なら Wordsworth は Coleridge よりはもっと漠然と論じたに過ぎず，にも拘らず，彼が到達した結論は Coleridge のそれと異ったものではなかった。また Wordsworth は Coleridge が主張する文彩の効用を一度も拒否したことはないし，また詩の語調は散文とはしばしば異るものであることも確認していた。同じく「序文」からの次の一節を検討して見るならば，Coleridge がこの件をいかに誇張ぎみに批判したものであるかが明白となろう。つまり，

「...上の引用によって散文の言語も結構，韻文に用い得ることが明らかにされた。またさきに私は，良き詩のすべてにわたって，それをかたちづくる言葉の相当部分はいかなる点においても良き散文の言葉と異るはずはないと断言した。もう一歩つっ込んで云おう。散文の言葉と韻文のそれとの間には本質的な違いはないし，またあり得ないと云い切ってよかろうと。...私はさきに韻文の言葉は散文の言葉とひじょうに似ていると説いたが，押韻と律動的配列の二者だけでも私の説をくつがえすに足る相違点をかたちづくっていて，心がすすんで認めるような，その他の人為的相違点への道をひらいているではないかと主張する人があれば，私はこう答えよう。ここで推奨するような詩をかたちづくる言葉は，

でき得るかぎり，人々が現実に話す言葉から選び出したものであり，この選択が正しい鑑識力と感情でなされた場合は，それだけで当初に想像していたよりも遙かに大きな特異性をかたちづくり，その作品を日常生活の粗野さと卑俗さから完全に引き離してしまうであろうと。それはさらに律動が加った場合，理性ある人士を満足させるに足る相違点が生み出されると私は信じる。...と云うのは，詩人が主題を適切に選びさえすれば，その主題はたくまずして，また適当な機会に，詩人を激情に導き，それを盛る言葉の選択が正しく適切であるならば，その言葉は気品と変化に富み，暗喩その他の文飾で生彩にみちたものとなるにきまっているからである。激情自体が自然に指し示す言葉に詩人が自分自身の工夫になる異国風の華麗な言葉を織りまぜた場合のちぐはぐさが，良識ある読者をひんしゅくさせる点に触れることは控えよう。そのような付加物は必要ないとだけ云えば足りる。」[9]（前川俊一訳）

(By the foregoing quotation it has been shown that the language of Prose may yet well be *adapted* to Poetry; and it was previously asserted, that a large portion of the language of every good poem can in no respect differ from that of good Prose. We will go further. It may be safely affirmed, that there neither is, nor can be, any *essential* difference between the language of prose and metrical composition.... If it be affirmed that rhyme and metrical arrangement of themselves constitute a distinction which overturns what has just been said on the strict affinity of metrical language with that of prose, and paves the way for other artificial distinctions which the mind voluntarily admits, I answer that the language of such Poetry as is here recommended is, as far as is possible, a selection of the language really spoken by men; that this selection, wherever it is *made with true taste and feeling*, will of itself from a distinction far greater than would at first be imagined, and will entirely separate the composition from the vulgarity and meanness of ordinary life; and, if metre be superadded thereto, I believe that a dissimilitude will be produced altogether sufficient for the gratification of a rational mind... for, if the Poet's subject be judiciously chosen, it will *naturally*, and upon fit occasion, lead him to passions the language of which, if selected truly and judiciously, must necessarily *be dignified and variegated, and alive with metaphors and figures.* I forebear to speak of an incongruity which would shock the intelligent Reader, should the Poet interweave any foreign splendour of his own with that which the passion naturally suggests; it is sufficient to say that such addition is unnecessary.)

イタリツクが示すように，詩の言語のよりすぐれた部分は散文の中にも見出される共通のことばと構造から派生したものであることを述べたに過ぎず，つまり，詩は韻律の影響下におかれて，熱情に鼓舞されると，その言語は通常の散文のそれよりも，より生彩のある文体へと自然に形成されるのであり，したがって，詩的文体へと達するための如何なる技巧的努力も悪趣味として退けられるべきとの謂である。事実この点に関して Coleridge も，自ら *BL* 第19章にて，

...and feeling a justifiable preference for the language of nature and of good sense, even in its humblest and least ornamented forms, he suffered himself to express, in

terms at once too large and too exclusive, his predilection for a style the most remote possible from the false and showy splendour which he wished to explode. (*BL.* II, p. 70.)

と弁護しているように，「当時，詩的な語法として適用していた文体の俗悪な虚飾に対して不快侮蔑の念を伴わないではなかったので，彼は一時その見解を狭めた」のではなかったか。さらに *BL* 第21章を読むならば，明確にそれまでとは態度を一転して積極的かつ雄弁に Wordsworth の弁護を試みていて，まことに興味深い。そこでは，Coleridge は当時の代表的批評誌に対する彼独自の活発な論議を展開する中で，つまり Jeffrey が Wordsworth に対して抱いていた敵意を徹底的に糾弾し，彼が Wordsworth に対して果さねばならぬと考へていた「積年の義務」を果したものと，思われる。自ら，冒頭にて曰く，

「世に公けにされた作品を根拠としてその特殊な美点や不充分なところ，または，その欠点と見られるべきものを比較的ではなくむしろ積極的に評価することによって，詩人としての Wordsworth 氏の本質への公明な哲学的吟味を試みて見たいと云うのが，私の長い間の念願であった。」

(Long have I wished to see a fair and philosophical inquisition into the character of Wordsworth, as a poet, on the evidence of his published works; and a positive, not a comparative, appreciation of their *characteristic* excellencies, deficiencies, and defects. (*BL.* II, p. 85.)

ことを明白にし，あくまで批評家が合法的に許された行動の広範囲にわたる原則をまず数多く示す。次に当時の代表的批評誌 *The Edinbugh Review*, その他の雑誌が読者の知的生活と鑑識眼の改善への貢献を再確認することからはじめる。しかし乍ら Coleridge は本来 *Edinbugh Review* に対しては，或る程度は批判的であった。以下，Jeffrey の Wordsworth に対する誹謗攻撃を論じて曰く，

「(一層遺憾の念を深くするのは)，理論整然たる議論による論証をせずに，ただいたずらに断言だけをこととしていること，気まぐれな，往々厚かましい判決をしきりに下すことである。しかもその判決たるや，当の槍玉にあげられている作品そのものからの引用を一つも用いないで下されている判決である。そうでなく原作品から実例を引用している場合でさえ，その引用は，そこに欠点として，あるいは許し難いものとして挙げている諸性質を，正にそれとして推論すべき基礎としての一般的根拠または法則といったようなものを何ら明示することもなく，またそこに欠点として挙げられている諸性質が事実引用文に正しく当てはまるゆえんを何ら明示することもなくして，行われているものである。事実このような種類の判決を下したところに添えられたもので，論者は作品を読む前に批評を書いたため，彼があらかじめ考えた意見のいろいろな方面を例証するのに逆に引用文を用いて，その真偽のほどを試めそうとしたのではないかと思われるような，ワーズワース氏からの引用文に出会ったこともある。」(10) と。

(I am referring to the substitution of assertion for argument; to the frequency of arbitrary and sometimes petulant verdicts, not seldom unsupported even by a single quotation from the work condemned. . . . Even where this is not the case, the extracts are too often made without reference to any general grounds or rules from which the faultiness or inadmissibility of the qualities attributed may be deduced; and without any attempt to show, that the qualities *are* attributable to the passages extracted. I have met with such extracts from Mr. Wordsworth's poems, annexed to such assertions, as led me to imagine, that the reviewer, having written his critique before he had read the work, had then pricked with a pin for passages, wherewith to illustrate the various branches of his preconcieved opinions.)

そして，Coleridge は *The Excursion* からのすぐれた一節を Jeffrey が「完全な狂気」の好例として物笑いとしたのに衝撃をうけ，「しかるに，その意味をより吟味してみた結果，私〔Coleridge〕の知性の最善の信念と完全に一致していることを認めたような詩，またその形容や用語もこの信念に基づいて私に最も愉快な感情はもちろん，最も高貴な感情を起させたようなそういう詩」であると高く評価し，Jeffrey が「呟語あるいは狂気の沙汰とすることは，どのような論議をもってしてもできることはない。」と憤激する。そして，そのように誹謗にみちた批評しかできない人間〔この場合，Jeffrey〕は，「ミケランジェロの高貴なモーゼの彫像」を眺めて，「そのいかめしい髪と超人的な角」とから，直ちに「雄山羊と海牛しか連想しない無頼漢」，つまり「像全体から受ける全一な印象に感じ入るようなことは毛頭なく，直ちに部分だけを見ようとする」ものと怒りをあらわにすることを隠そうとしない。

最後に *BL* は Wordsworth の詩のもつ特有の欠陥とそれを欠点として判断すべき原理的根拠並びに美点に対する欠点の割合を指摘することで，彼の批評を終えている。Coleridge は，まずそれらの欠陥を5つとりあげる。要約的に云えば，まず文体の不同，次に人物や事件についてあまり精密に事実性に固執し過ぎること。三番目はある詩の中で劇的形式を用いたがる過当な偏向，④折々の冗漫，反復，及び思想の展開がなく施流が見られること，そして最後に思想と形象とが主題に対してあまりにも大きすぎること等である。しかしながら，このような短所と云えども，彼の評価によれば，それは occasional なものに過ぎず，長所の方にむしろ，より大きな信頼がおけるとするのは妥当な評価と云うべきだろう。Coleridge は短所と同じく長所を5つあげる。まず第一は文法的にも論理的にも言葉が極めて純粋であること，つまり言葉と意味との完全な一致，第二は思想と感情とが互いに相呼応して，重みと健やかさがあること，つまり詩人自身の瞑想的観察からくる露のようなさわやかさ，第三の優れた特徴は，一行や一節として持っている，腱のような強靭さと独創性とである。この美点は彼の最も猛烈な攻撃者でさえ，優れた特質として認め，かつ賞讃せざるを得ないとする。第四の美点は，直接に自然からとりあげてきたもので，一切の自然現象にそれ相応のそれぞれ特徴ある様相を与える霊そのものとの長い間の，そして親しい交わりを証明するものとして，彼の形象や描写に現われた全く真に迫った自然の姿である。第五の美点は「瞑想的哀愁感，

すなわち深遠なそして精美な思想と感受性との融合」である。即ち人間としての人間に対する同感の念，万人に共通の基本的な人間性を表面的な人間の差別とのうらに見抜いている点である。なかでも至高かつもっとも厳格な意味において Wordsworth は，Fancy の点では必ずしもそうではないが Imagination において卓越しているとする指摘は Coleridge の批評眼の鋭さと云うべきだろう。曰く，

> But in imaginative power, he stands nearest of all modern writers to Shakespeare and Milton; and yet in a kind perfectory unborrowed and his own. To employ his own words, which are at once an instance and an illustration, he does indeed to all thoughts and to all objects
>
> '_____add the gleam,
> The light that never was, on sea or land,
> The consecration, and the poet's dream. (*BL*. XXII, p. 124.)

「しかるに，想像力の点においては，彼は，すべての近代作家中，シェイクスピアとミルトンに最も近い位置を占めるものである。しかも，それは他からの借りものではなく，全く彼自身のものなのである。その例ともなり，また同時にその説明ともなる彼自身の言葉を用いていうならば，彼は実際すべての思想とすべての物象に，

『海にも陸にもかつてない輝きを，
光りを，聖別を，そして詩人の
夢を加う』」と。

III

しかるに，Wordsworth 批評史における *BL* の価値は確かに高いものであるけれども，そこから受ける印象はやや意外である。殊に *BL* が書かれたのは両者の友情の決裂（1812）後であったことは，両者にとって真に不運と云うべきか。何故ならば，真の Wordsworth 解釈に寄与できたのは Coleridge 一人であり得たであろうからである。かつての深い理解に支えられ，同一の精神性を享受した密月時代は去って，彼らの間はもはやかたくななものとなっていた。したがって彼の Wordsworth 批評は時には揚足取りとなりまた誤解を招くもととなった。それはとりもなおさず Hazlitt 的に辛辣な酷評や，あるいは敵意や報復的性格を意味するのではない。かつての友情の語調はそれ自体消え失せ，その結果，大々にして我々は Coleridge の執筆の姿勢の微妙な変化と，精神的な疎隔とを念頭におかないで，無意識のうちに Coleridge 的 Wordsworth 批評の形成におちいる危険にあるからである。真に我々が Coleridge に期待するものは，他の批評家たちに見られるたぐいのものにあらず，と云えば過ぎたる要求と云うことになるであろうか。事実1817年，*BL* 出版の年に Wordsworth が必要としたものは，彼のつまらぬ，屢々饒舌とも云うべき短所を切り開き，詩魂のありかを熱情的理解をもって大衆の前に開示してくれる偉大な精神——つまり Wordsworth が当時

人類に寄せた強烈な関心，人間と自然との結合，血肉としての人間を超えて事物の生命にまでわけ入るに至ることができた時のあの高揚せる精神の瞬間に対するあの絶妙な理解を開示してくれる偉大な精神であった。Coleridge こそ，そのような偉大な理解者となり得たであろう。Coleridge は長々としかも玄学的技巧を弄して Wordsworth の詩の言語と韻律とを論じ，自らの意図を表明せんとして，結果においては，Wordsworth の使用せしことばの，時にはあら探しとなり，また時には，Wordsworth が心に抱いていた素朴な自然の物象への歪曲におちいったことは，ある程度は否めない。殊に我々読者が，*BL* を通じて Coleridge 批評に記憶するものは Wordsworth の「序文」の粉粋である。当時の批評家達にとって不人気の原因としたその「序文」に関しては，因みに云えば，Wordsworth は既に1815年版においては補遺にまわしていた。にも拘らずその「序文」における詩論をめぐって，Coleridge は執拗にも1817年の遅きにおいて意見の違いをとりあげるに至ったのであった。そして，我々はそのような Coleridge 的な理解のもとに，勿論この詩人にとって遙かに基本的なものへの洞察を試みる。Coleridge はさらに，多くを語る。ただそれだけである。究極的には Coleridge の Wordsworth 批評はまさに彼自身のことばを借りて云うならば「想像力」に富んだ解釈とは云い難い。

勿論，かくの如き Wordsworth 批判の兆候は *BL* 以前にまで溯ることができる。Coleridge は Robert Southey 宛の手紙［dated, July 29, 1802.］の中で，"Concerning Poetry and the characteristic merits of the Poets, our contemporaries,"（「我々当代の詩人達の固有の長所と詩に関して」）と云う一文を書く意図があることを書き，殊に Erasmus Darwin と Wordsworth が彼らの創作体系を弁護したこととの関連で，詩の重要な本質を論ずることを提案していて，興味深い。

> But I will apprise you of one thing, that although Wordsworth's Preface is half a child of my own brain, and arose out of conversations so frequent that, with few exceptions, we could scarcely either of us, perhaps, positively say which first started any particular thought (I am speaking of the Preface as it stood in the second volume), yet I am far from going all lengths with Wordsworth. He has written lately a number of Poems..... the greater number of these, to my feelings, very excellent compositions, but here and there a daring humbleness of language and versification, and a strict adherence to matter of fact, even to prolixity, that startled me.... I rather suspect that somewhere or other there is a radical difference in our theoretical opinions respecting poetry; this I shall endeavour to go to the bottom of, and, acting the arbitrator between the old school and the new school, hope to lay down some plain and perspicuous, though not superficial canons of criticism respecting poetry. What an admirable definition Milton gives, quite in an "obiter" way, when he says of poetry, that it is "*simple, sensuous, passionate!*" It truly comprises the whole that can be said on the subject. In the new edition of L. Ballads there is a valuable appendix, which I am sure you must like, and in the Preface itself considerable additions; one on the dignity and nature of the office and character of a Poet, that is very grand, and of a sort of Verulamian power and majesty, but it is,

in parts (and this is the fault, *me judice*, of all the latter half of that Preface), obscure beyond any necessity, and the extreme elaboration and almost constrainedness of the diction contrasted (to my feelings) somewhat harshly with the general style of the Poems, to which the Preface is an introduction.... Sara said, with some acuteness, that she wished all that part of the Preface to have been in blank verse, and *vice versâ*, etc. However, I need not say, that any diversity of opinion on the subject between you and myself, or Wordsworth and myself, can only be small, taken in *a practical* point of view.(11)

まず我々は，この手紙から，いくつかの結論を得ることができる。明白なことはまず第一に，Coleridge の詩に関する見解にこのときすでに変化が生じつつあった。したがって Coleridge は Wordsworth との意見の違いを表明し，かつ，彼自身の理論を説明するのに熱心であったことである。にも拘らず Coleridge は *BL* の出版（1817）まで自己の見解を表明することを延ばしたのであった。惟うに，この頃は（1802年），Coleridge は Wordsworth とはなおも親密な関係にあったことを考えるとき，そのときに自らの見解を明らかにした方が，彼の主張はより整然としたものとなったであろう。とにかく，このような経果を経て彼の Wordsworth 批評が大々にまず「序文」からとりあげられるに至ったことが明らかとなる。第二の点は「序文」を 'half a child of my own brain'「半分は私自身の作」と主張している点である。これは，たとえいくらかは誇張であったにしても Coleridge が批判の対象とした「序文」の中にもられた詩論の創作には彼が幾分関与したことは重大なことであったに違いない。たしかに両詩人の間にかわされた対話の中で Coleridge はそこにもられた思想のすべてにわたって，習熟していたであろう。しかるに Wordsworth の見解を誤解することは恐らくは不可能であった。しかしいったん彼が *BL* の執筆にとりかかるにいたったとき Coleridge は Wordsworth の見解の或る点，つまりその理論がどの程度まで *BL* 中の実験詩にのみ，適用できる積りであり，またその他のすべての詩にはどうなのか，確信できないと表明するに至った。殊に彼は一二の重大な点，「人々が実際に使う言語の選択」と「散文の言語と韻文の言語との間にはいかなる本質的違いはないとする」主張を問題であるとした。しかし乍ら，その語調から，Coleridge が，「序文」の中にもられた詩論の形成に幾分参与し，かつその責任の一部が彼にもあったことを察することは誰しも困難であろう。第三は，同じく Wordsworth の側にもその責任はあろう。「序文」にもられた詩論への Coleridge の貢献を Wordsworth は自ら明らかにすべきであっただろう。勿論，「序文」の大部分は，それが書かれた後は Wordsworth のものであったし，またそこにもられた理論を実践したのは Coleridge ではなく Wordsworth であった。しかし，Wordsworth は一部においては，それが同僚 Coleridge との対話に負うていることを明らかにすべきであっただろう。

然はあれ，*BL* 以外では書簡や対話の中でまた Coleridge 程に同時代の批評家達の中で Wordsworth を深く掘り下げて解説し，また心から賞讃したものもいなかったことを見逃してはならない。

この種の言及はしばしば広範囲に見られるが，当時一貫した批評体系をなして活字として大衆の目にとまったものではなかったからである。さらに，1812年に両者の関係を記した Crabb Robinson の記事[12] を読むならば，そこには当時における両詩人の不幸な仲違いの時期への言及と，また，彼らが夫々の詩と思想にかつてあれ程寄与しあっていたあの相互理解をなおも両者は完全に失いはしていなかった証左として興味深い。

Notes

(1) *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross, 2 vols (Oxford, The Clarendon Press, 1969), II, 6.
(2) *Ibid.*, I, 51–52.
(3) *Ibid.*, II, 28.
(4) *The Prose Works of William Wordsworth*, ed. W. J. B. Owen and J. W. Smyser, 3 vols (Oxford University Press, 1974), I, p. 125.
(5) *BL.*, *op. cit.*, II, 31.
(6) *Ibid.*, II, 38–39.
(7) *Ibid.*, II, 39–40.
(8) *Ibid.*, II, 49.
(9) *The Prose Works*, *op. cit.*, I, 135–137.
(10) *BL.*, *op. cit.*, II, 90.
(11) *Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. L. Griggs, 8 vols (Oxford University Press, 1966), vol II, 830–831.
(12) Coleridge was at all times a profuse eulogist of Wordsworth's poems but always with qualifications & even with objections to Wordsworth's diction & style, which indeed he has printed. And he was passionate in his professions of love to him as a man, but these professions expressed but the feeling of the moment. Wordsworth's words might be considered as announcing his permanent convictions. . . . "But no one," said he (Wordsworth), "has completely understood me — not even Coleridge. He is not happy enough. . . ." But Wordsworth was loud in his praise of the powers of Coleridge's mind which he said was greater than those of any man he ever knew. From such a man under favourable influences anything might be hoped for. His genious he thought great, but his talents he thought still greater & it is in the union of such much genious with so much talent that he thought Coleridge surpassed all other men. Wordsworth in a digression remarked of himself that he had comparatively but little talent: genious was his peculiar faculty.

— *Blake, Coleridge, Wordsworth, Lamb, etc. Being Selections from the Remains of Henry Crabb Robinson*, ed. Edith J. Morley (Manchester, The University Press, 1922), p. 49.

(1979年10月15日　受理)